

新発見の庄野潤三編・庄野英二著「鳥の糞^(ふん) 第一号」
「同上 第二号」の翻刻と論考

The New Discovery Magazines of *Feces of the Bird*, No.1 and No.2 edited by
Junzo SHONO and Written by Eiji SHONO: A Reprint and Study

鷺 只雄

Tadao SAGI

(1)

一

庄野潤三に当時中国大陸に出征していた兄英二の書簡や小品や習作を集めて「鳥の糞」という二冊の謄写版刷りの雑誌を出したこと(昭和15年2月25日と同年4月20日刊)があり、後年それについて二度ほど長い回想¹を書いているが、ここでは『文学交友録』の方から次に引いておきたい。

私と兄英二との文学的なかかわりについて話そうとすれば、最初に「鳥の糞」のことから始めなくてはならない。原稿の書き手は兄英二、編集発行人は弟の潤三という冊子があつた。中国大陸で戦争が起こつてから二年ほどたつたころである。謄写版刷りの薄いもので、一号、二号と続けて出たが、その二号きりで終りになつた。あれがどこから出て来ると面白いが、無理だろう。その当時、軍隊にいた兄が、自分の近況を親しい方たちに知らせる目的で刊行された冊子であり、それを受取つた方もおそらくみんな亡くなつておられる筈だから、どこかから出て来るといふこともないだろう。

発行人であった私の手元に一冊くらいは保存してあった筈だが、家の中で「鳥の糞」を見かけたという記憶がない。

昭和十四年の春、大阪で編成された部隊とともに中国へ渡った陸軍少尉で小隊長の兄は、大別山中を転戦したあと、十二月に揚子江岸の南昌に入った。私は大阪外語の一年。或る日、兄から私宛の手紙が届いた。こちらの様子を親しい方たちに知らせたいが、一人一人に書いている暇がない。そこで自分が折々の印象を文章にして送るから、謄写版刷りの小さな冊子にして皆さんの手もとへ届けてほしい。その編集発行の一切を潤ちゃんに任せる。費用は送る（あるいはその手紙にいきなり郵便為替が入っていたかも知れない）。送り先は次の通り。―その人数はあまり多くなかったような気がする。せいぜい二十人くらいではなかったか。

その送り先の中には、東京雑司ヶ谷の坪田譲治、大阪住吉の藤沢桓夫のお二人の名前があった。坪田さんは児童文学を志していた兄の師である。兄の年譜によると、昭和十年のところに、―坪田譲治氏の『お化けの世界』を読み感動する。自分の文学が方向づけられた思いであった。夏休みに上京し初めて坪田譲治氏の門を叩く。旧著『正太の馬』を頂く。

と書かれている。関西学院在学中の出来事である。兄はこのとき、二十歳。なお、坪田さんに師事してこれから童話を書くうとしていた兄は、一方で大阪在住の藤沢桓夫の作品を愛読し、住吉の藤沢さんのお宅を訪ねるようになった。

多分、最初に兄から届いた手紙に、刊行のことばとともに何篇かが同封されていたに違いない。

(中略)

ところで、編集発行人の手並みはどうであったか。これが頗る感心しない。なるほど私は兄の手紙を清書した。目次をこしらえた。編集後記を書いた。天王寺あたりの印刷所を見つけて交渉をした。つまり、兄にいいつけられただけのことをしたけれども、いくらかそれは「小僧の使い」に近いところがあった。もう少し体裁のいいものにするために工夫すべきであった。カットをせめて一つくらい入れたらよかった。いま頃になってそんなことをいい出しても始まらないが、兄に対して、この戦場通信を受け取る方たちに対して申し訳のないことをした。

一号が出来上つてみると、表紙の「鳥の糞」という字がいかに大きい上に、インクの附きがよすぎて、そこら辺がふくれ上つたようになっていた。これでは読者は、詩的空想力を刺激されるよりも先に、鳥のからだから落とされたばかりの、まだ乾かない、中には呑み込んだ木の实がそのままのかたちで残っている、あの実物の感触をただちに思い浮かべるのではないだろうか。これはいけない。

二号目からは（といっても、その二号でおしまいになったのだからどうにもならない）題字を少し小さく、細目にしてもらった。これでいくらかましになったものの、ひよどりが四十雀に変わった程度の違いで、あの鳥の糞の感触は無くならない。もし立場が入れ替わって、兄が編集発行人であつたら、きつと自分がかいたカットを挟んで、（子供のころから絵が好きであった兄は、中年になつて油絵をかき出した。どこへ旅行するにもスケッチブックを放さない人間になった）、すつきりした、楽

しいものが出来上っていたに違いない。

春になって兄の手紙はぱったり来なくなつた。原稿が来ないのだから、「鳥の糞」も出しようがない。(以下略)

ここで庄野潤三が言っているのはこういうことだ。児童文学作家として著名な次兄の英二との「文学的なかわり」については「鳥の糞」という雑誌のことから始めなくてはならない。

その雑誌は書き手は兄の英二で、編集発行は弟の潤三。謄写版(或はガリ版とも言う)刷りの薄い雑誌で一号、二号までは出たが、その二冊きりで終りになった。

発行のいきさつはこうだ。昭和十四年の春に大阪で編成された第三十四師団の第二百十七連隊小隊長として華中へ出征した英二は、湖北省の大別山から武昌、九江、と転戦し、十二月に南昌に到着。明けて昭和十五年の二月、負傷した中隊長に代わり、第二百十七連隊第十二中隊長に任ぜられて前線に出動。敵とは六里を距てた塹壕で対峙する。しかし、戦線は呑気なもので、前線から時折聞えて来る砲声が無かつたら戦場の町とは思えない静けさであり、手持無沙汰である。そこで英二はヒマつぶしもかねて一計を案じ、当時大阪外語の学生(昭和十四年4月〜16年12月繰り上げ卒業)であった弟の潤三にあてて次のような依頼の手紙を書く。

中国での様子と近況を親しい方たちに知らせたいが、一人一人に書いている暇がない。そこで自分が折々の印象を文章にして送るから、私的な部分は除いて謄写版刷りの小さな冊子にして皆さんの手もとへ届けてほしい。その編集発行の一切は潤三に任せる。費用は送る。送り先は次の通りとして、「二十人くらい」の名前があり、

その中でも今でも記憶に残っているのは、師として生涯敬愛した坪田譲治と、その作品を愛読した大阪在住の作家藤沢桓夫である。

つまり英二のたくらみは忙中閑あり、閑中忙あり、兵馬の倥傯の中にあつていたずらに、空しく浪費され、遂には生命まで奪われてこの世に存在した痕跡さえも残らずに葬られようとしている状況に對する果敢な挑戦と呼んでいいであろう。「鳥の糞」と敢て戯文を装つて謙遜しているが、後述するように内実はしたたかに人生の真実にどつかりと根をおろしているものであり、英二の詩心を鋭く刺戟したものに相違ない。

この点についての論及は本稿全体が負うものなのでこれ以上の言及はここでは避けるが、もう一つだけ付言しておきたい。

それは編集発行人としての「手並」の悪さについての自責の念についてである。これが非常に強く、「なるほど私は兄の手紙を清書した。目次をこしらえた。編集後記を書いた。天王寺あたりの印刷所を見つけて交渉をした。つまり、兄にいいつけられただけのことをしたけれども、いくらかそれは『小僧の使い』に近いところがあつた。」として、もう少し「体裁のいいもの」にするための工夫―たとえば後年旅行の際にはスケッチブックを手離さない人間であつた兄のためにはせめてカットを一つくらい入れればよかつたと後悔の臍を噛むのである。更に表紙の「鳥の糞」については「字がいかにも大きい上に、インクの附きがよすぎて(中略)これでは読者は、詩的空想力を刺戟されるよりも先に、鳥のからだから落とされたばかりの、(中略)あの実物の感触をただちに思い浮かべるのではないだろうか。これはいけない。

二号目からは(中略)題字を少し小さく、細目にしてもらった。

これでいくらかましになったものの、ひよどりが四十雀に変わった程度
のの違いで、あの鳥の糞の感触は無くならない。」

ここでは誰しもがそうであるように若年時の思慮の足りなさが後
悔されているのであるが、事実とは違う点を指摘しておく、表紙
の「鳥の糞」の字について、一号は「大きい上に、インクの附きが
よすぎて」読者に不快感を与えるので、二号では「題字を少し小さ
く、細目」にしてもらったというが、本稿に転写した表紙のコピー
を参照していただければ明らかのように、実際はそうはなっていない。
作者の勘違いである。

もう一つ、せめて絵の好きだった兄のためにカットの一つも入れ
てやらなかったことを悔いているが、実はこれも勘違いで、ちゃん
と二号の「もぐら部隊長雑記」中の〈樟を焚く〉の項にはいかに
風情のある田舎の自在かぎのカットが描かれていることを指摘して
おきたい。

そして雑誌の二号が出てから間もなく、生死を分かち激戦となり、
敵の機関銃によって右手を負傷し、生涯閑節が不自由となる大怪我
をして内地の病院へ転送されたため、雑誌どころではなくなつた。

以上、「鳥の糞」の成立とその由来について述べたが、稿者はこ
の雑誌(冊子)を多年探索して来た結果漸く「鳥の糞」一、二号共、
東京の古書店で入手することができたので、以下これを翻刻し、稿
者の論考も付しておきたい。

凡例

本文はつぎのような方針で定めた。

イ 新字・新仮名遣いとした。

ロ 漢字、仮名の使用についても、原文を尊重して漢字を仮名
に開くようなことは一切しなかった。

ハ ふりがな(ルビ)・傍点についても原文の通りとした。た
だし、ルビに()がついているのは原文にはないが、稿者
が読者の便を考慮してつけたものである。

ニ 原文の表現・表記を改める場合には慎重を期し、改めた場
合には必ず「ヴァリアント」(本文の異同)の項に、その部
分を改めた根拠を記して、読者が確認できるようにした。

ホ ただし、仮名遣いの誤記・誤用についての訂正をしたもの
についてはとりあげていない。

一一

「鳥の糞」の書誌的事項について略記すれば次のようである。詳
しくは後に翻刻するのでここでは概要を示す。

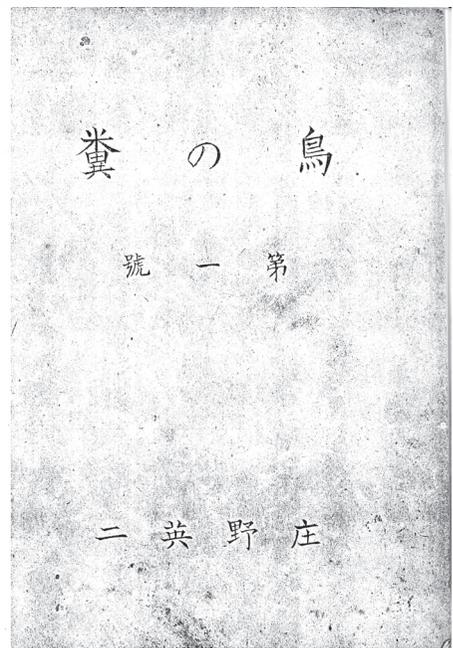
第一号(タテ21・4 cm ヨコ15・2 cm)

目次・本文(2頁)12頁
編集後記・奥付(12頁)

第二号(タテ21・4 cm ヨコ15・2 cm)

目次・本文(2頁)18頁
奥付(19頁)

①「鳥の糞」一号の表紙コピー



②「鳥の糞」一号の目次コピー

鳥の糞

第一号

目次

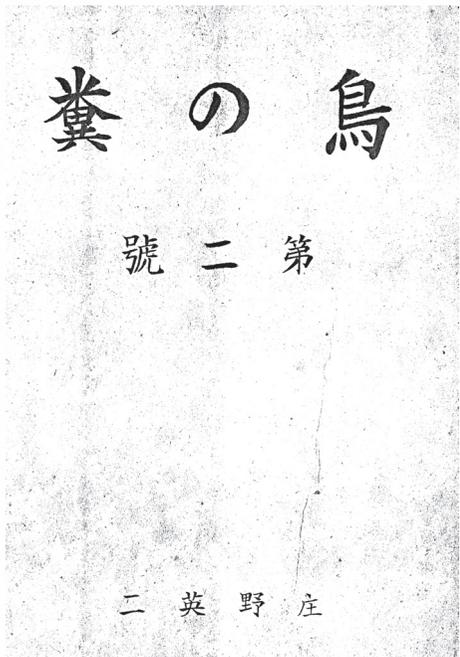
「鳥の糞」題詞……………	三
降誕祭の日の日記……………	四
新年を迎へる三三間の日記……………	六
庭の小ハイ……………	八
編輯後記……………	二

③「鳥の糞」一号の奥付コピー

編輯後記

篠屑ならぬ鳥の糞を、かい果めることにしました。皆様のお又持、御後援をお願ひすると共に、編者も愛づまりを求さぬ様せいぜい氣をつけるつもりです。又御感想でも承る事が出来れば、欣快至極に存じます。

④「鳥の糞」二号の表紙コピー



昭和十五年二月二十日印刷
昭和十五年二月二十五日発行 (非賣品)

中文派遣大隊隊氣附
落合部隊庄野隊

著者 庄野英二
大塚市住吉區住吉町九〇ノ二

発行所 庄野潤三
大塚市住吉區住吉町三三〇

印刷所 プリント社
電・天・三三三番

△無断上版・上演・複製を禁ず

⑤「鳥の糞」二号の目次コピー

鳥の糞
第二号

目次	
もぐら部隊長雑記	2
もぐら暮らし	
千人針	
人形	
小鳥	
エビフライ	
樽を焚く	
穴くらだより	
菜の花	
雨もり	
アベラガス	
樹氷	
カアチャンの手紙	
戦場の歳事記	
舊正月の日の半日	
桃の花	

⑥「鳥の糞」二号の奥付コピー

昭和十五年三月三十日印刷
昭和十五年四月二十日発行 (非賣品)

著者 庄野英二

発行者 大坂市住吉區住吉町九の二
庄野潤三

印刷所 大坂市天王寺區勝山通一ノ三四
プリンント社
電話 天王寺一三七番

△無断上映・上演・転載を禁ず

ヴァリアント

「鳥の糞」解題——鳥の糞を始めるに際して

7頁下段16行 不見転……不転見

降誕祭の朝

8頁下段6行 臆病……憶病

新年を迎える三日間の日記

9頁上段14行 阪口……坂口 以下全て「阪口」とあるので改めた。

庭の小ハイ

11頁下段7行 むつかしすぎた……むつかすぎた

戦場の歳時記

16頁上段16行 歳時記……歳事記

樟を焚く

13頁下段7行 浮世の苦勞……浮世苦勞

14頁上段14行 いぶらすと暖かい……いぶらす暖かい

14頁上段15行 一緒……一諸

14頁下段2行 筍……苟

14頁下段4行 孟宗……猛宗

14頁下段12行 筍……苟

カアチャンの手紙

16頁上段10行 相好……相恰

戦場の歳時記

16頁上段16行 歳時記……歳事記

旧正月の日の半日

17頁下段11行 霜になえた……霜にいえた

桃の花

18頁上段3行 ドロドロになる。並大抵ではない……ドロドロにな

る並大抵ではない

18頁下段12行 ぜんざい……ぜんざい

三

以下、「三」章「四」章が翻刻で、「五」章「八」章が論考である。

「鳥の糞」解題

―鳥の糞を始めるに際して

永らく御無沙汰申し上げています。

近況報告までに陣中通信とも云うべきものをささやか乍ら之から

時々御届けする事に致します。

兵馬の倥偬と―いやそれよりも生来の無精者で変転極まりなき戦場の風物や兵隊の人情など克明に描写したりする余裕も能力も持ち合わせて居りませんし、それに角ばったルポルタージュなど出来そうにもありません。

が幸い現在大阪外語に在学中の愚弟の力を借りまして小生の私信中より私事に亙る事だけをカットして水入らずの親戚始め極く親しい範囲の人達に読んで頂く事に致しました。

出来る事なら毎月続けたいと思つて題をつけました。

鳥の糞なんて甚だ上品でもないので少少きまりが悪い様であります。私の手紙と云うものがそもそも誰方も御存知の悪筆（我親友にして南支にある歌人の長尾正昭少尉は「電子の運動に似て紙面狭しと飛び散る字、書態をなさないのに、ぐんぐん若さに惹かれる様な―天体の整然たる軌道から不心意にも飛び出した遊星の様に失墜の天使の性を帯ぶ字。けれ共親友達には此の支離滅裂の字の間から、あえかなる彼の風丰とほとぼしる不見転が仄仄と共感される字なのだ―」と評しています）でなぐり書きして家郷にあてたのであります。征旅幾月到处で腹一ぱいにつめこんだ大陸の風物、兵隊の感傷、戦争の意欲、そんなものが腹の中で飽和され消化する力足らず生みつばなしにされたまま、いや生まれると云う様な上品なものじゃなくて、つまり私の宿舎の庭や木の枝や石だたみに一面に行儀悪く汚くまきちらしている所の白い流動状のものや木の実をそのまま出した丸葉の様な鳥の糞のようなものであります。支那事変で蒋介石の次に名を売った兵隊文学の火野葦平の出世作が糞尿を取扱った話でもあるし、それにあやかるような気持ではありませ

んが名前など慣れればどうだつていいと思つて仮につけました。

私は今中支の或る都会（町は大きくて立派で美しいが、人のいな
い死んだような）にいます。私と私の隊の兵隊は一軒の洋館に住ん
でいます。大木に囲まれた森のような庭の中の家です。裏には支那
に珍しい清澄な〇河が流れています。葉の落ちた庭の木々やあたり
の森には数えきれぬ鳥の大群がすくつています。一度に飛び立てば
蒼穹をきつて形をかえるばかりです。朝から晩迄物すごく啼きつづ
けます。先程も日の暮れる前私は二階の窓から鳥の大群を感じして
眺めていました。不図目を庭に落とすと年の若い一人の兵隊が大木
の幹にもたれて空を仰いでいるのでありました。しばらくすると鳥
の大群は何処かの森へ運動にいつてしまいました。その兵隊は馬鹿
の様にまだ空を見ていました。僕の二階から見ているのに気づかな
い様です。今度は指をあげて空間に何か書いています。此の年の
若い兵隊は後三日もすれば来る正月を始めて戦地で迎えるのです。
きつと故郷の正月でも思い出しているのでしょうか。絵を書いたのか
字をかいたのか兄弟の名をかいたのか私には分りませんが、其の時
サワサワサワサワと爽やかな羽の音をさして鳥の大群が又舞い戻つ
て参りました。其の時私は右の人指ゆびで左の掌にカタカナの字を
書いて居りました。

トリノフン、トリノフン、トリノフン

三度書いてつばをつけてこすつて臭いをかぐと少年の時友達同志
信じあつていた仄かなる臭いと共に美しき日の数々の思い出がよみ
がえりしばしの間樂しき感傷にこゝこつとなつた次第であります。

降誕祭の朝

二千年前の今日神には栄光地には平和と救世主の降誕に歡喜せし
ベツレヘムの村人達は今日の人類の悲しみを夢想だにしなかつたで
あろう。そんな事はどうでもいいとして今日はクリスマス。やはり
うれしい日であつた。以下それをのべん。

深い眠りの今日の曉頃、戦場へ来て以来、臆病な位鋭敏になつて
いる僕の神経はただならぬ音に目を覚ました。うつらうつら半分眠
り乍らも耳をかたむけてみると、それは合唱である事が分つた。まっ
くらだし兵隊はよく寝ているし、しばらくあつけにとられている中
にああそうだと始めて気がついた。僕はよい心持で聞き乍ら又眠り
についた。救世主の降誕を祝福するクリスマスキャロルは数里先の
今も手榴弾のなげ合いをしている修羅場をよそに高く低く曉の闇を
ついて聞こえてくるのである。ディケンズのクリスマスキャロルを
読んだり内地の教会や関学でもやっているのは知っていたが聞いた
のは始めてである。

隣と向いはアメリカの家と教会、僕の家と同じように広い庭が
あつて毎日使用人のニーが落葉を集めてやいている。僕はベランダ
で日なたぼっこをしていると見下ろせる様になつてゐる。兵隊の話
では赤いベレーを被つた外人の女が落葉を踏んで向いの教会へ行く
のを時々見たと云うが僕はまだ隣は何をする人ぞ知らない。

さて、朝寝をしてあわてて飯をくつて本部へ行き一寸用事をして
帰つて来て顔を洗おうとベランダへ出ると当番のくんだ洗面器の水
の中にあやしげな黒い丸いクレオソートのようなやつが十粒余り

入っている。僕は苦笑して顔を洗うのを止めた。僕の家は大きな森のような庭の中にあつて鳥が数千羽巣くつている。木の実を食べる。其のたねを体内を通過してバラまいたり黒いのや白いのや毎日糞の掃除で大変である。

此手紙を書く途中に間食の南京豆を食べ始めた。意地になつて却々やめられず大変長時間をつぶしました。其の為此の手紙も途中で間がぬけてしまいました。之で擱筆します。鳥がやかましくなっています。裏の河をカヌーの様な真中にアンペラを丸くのせた舟が数隻横に並んで金色の夕陽を浴びてねぐらへ帰つてゆきます。とても静かな平和な美しい景色です。之が戦場でありましょうか。

新年を迎える三日間の日記

十二月三十一日

朝昨夜の……を調査に側車サイドカーを走らして○○隊へ行き其序に昨夜村尾中尉のいる部隊がついたので逢いに行く。今夜入院中の阪口中尉を見舞いにゆく事を約し帰る。今年の仕事を来年に残さぬように○○の書類を一気に作りあげ○○命令を一つ起草する。仕事が終わつた六時頃阪口から伝令が来てスキヤキの用意をしているから直ぐ来いと云う。外套をとりに一先ず宿舍へ帰るとうす暗い炊事室に、炊事当番が冷凍の鯛の尾頭を塩して焼いたりごまめを煮たり懸命である。「隊長殿、風呂が良い加減です。」折角待つてくれている湯を断る事も出来ず今年最後のあかも落とそうとカメ風呂へ入る。風呂と炊事は隣合わせなので僕は湯につかつたまま話しかける。「お正月

の料理は何と何だい？」「たいの尾頭、ごまめ、こんぶ、するめ、かちぐり、かずの子―餅は明日四時起きして焼いて雑煮に入れませ。」「ほほう中々御馳走だな。」焼物の香いがプンプン流れてくる。僕の手ぬぐいを四つに折つて頭にのせる。そして目をつむる。たちまち我家の台所が目に浮かぶ。今は夕方の七時、父は漸く仕事がつづいて茶の間の机にすわっている。仏壇と神棚には灯明が上がつていいる。至公と渥子はつまらぬ事で小ぜり合ひをしている。母は台所で忙しそうにお煮しめをたいていいる。父が二階に向かつて二三回よぶと潤三がのつそりと降りてくる。滋子が雑誌を読んでいる。「みんな神様を拜んだか。仏壇を拜んだか。英二の武運長久を祈るんだ。」殊勝に皆たつて仏壇を拜む。台所にはお煮しめをたく湯気がもうもうと立上つていいる。

今炊事をしている兵隊達。誰も一樣に我家の事を思い浮かべていいるに違ひない。かまどの煙にむせんで郷愁の涙を流しているのである。田舎の暗い台所で毎年毎年手伝つたからこそ煮しめの要領も心得ているのである。僕の郷愁は兵隊への感傷に変わる。僕はも早スキヤキの用意をして待つていいる阪口達の事も忘れて折角の夕飯を宿舍で食べていく事にする。風呂から上がると飯を運んでくる。好物のピフテキを焼いている。当地の肉は新鮮過ぎる為か水牛の肉か、とても固くて歯がたたぬので有名である。それにも関らず僕の食べるピフテキはとても柔らかい。包丁の背で丹念にたたいてくれているからである。食後下士官に明日の指示をしてきて約束の病院へ行く。手をいかれた阪口、首と足の上出少尉、脚気の渡辺、其部屋では既にスキ焼きが始まつていいる。阪口の傷は案外軽そうである。右手くび軟部貫通、神経が一寸やられてるらしいが傷は大分よくなり掌

の先に巻いてあったほ―たいは今日は掌が出されてある。宴半ばにして後二時間で今年もいこうとする頃、彼は左手で不自由そうにウクレレをとり出した。兄思いの彼の弟が音楽好きの兄の為に陣中の慰めにもと送つて来たものであるが、それが届いた時には既に負傷していたのである。漸く右手先のほ―たいがほどかれた今日首から吊るした不自由な手先で傷のうづきにおびえながら弦を弾き始めたのである。

涙ぐましいはずの奏楽であるにも関らず天来のユーモラスな性格を具えた阪口のかき鳴らすウクレレは忽ちクレゾールとすきやきの臭いの充滿した室内をうきたつばかりの和やかな空気に変えてしまった。そればかりではない。傷のうづきにはらはらするのはまわりにいる僕達だけで御本尊は自分の伴奏に合わせてジャズソングを歌い始め今にも得意のタップを立ち上がって踊り出すのではないかと思われた程であった。傷ついた阪口中尉のかきならすウクレレと唱和する楽しい歌声の伴奏裏に今年の幕はとじたのである。

一月二日

皇紀二千六百年戦地に二六の新春を迎えた。此間から「敵屍二千六百」など考えていたが、暁暗に起き出て東天を拝したセツナ其考えはふつ飛んでしまった。日本民族はほんとの平和を愛する民族である。

此間送られて来た家族の写真に向かって新年の祝詞を云うと目頭が熱くなって涙ぐんでしまった。

どうもいけねえ―武人らしくない。

遥拝式後川にのぞんだ裏庭で宿舎に残っている兵隊と祝宴をは

る。

庭の小ハイ

一月二日

至ちゃん、おめでとう

今日は正月三日、僕は二階のベランダで日なたぼっこをしている。僕の今いる所は日本の春のように暖かで昼間は外套も火鉢もいらない。僕は余り暖かなのでウツラウツラとねむくなる。此処からは隣の庭も見下ろせる。隣は青い目のアメリカ人の家だがアメリカ人はめつたに姿を見せない。いつも庭掃除のニー（支那人）が落葉をはいたり洗濯物をほしたりしている。

鳥や雀が庭へ餌を拾いに来ている。檜原と云う炊事当番の兵隊が炊事場へ残飯を食べに来た雀の一群を追い出して来た。僕が二階から見ているのに気がつくくとニッコリ笑って

「隊長殿、この雀は心臓がつよいです。」

僕はフキ出した。

隣のアメリカ人の庭へ一人の子供が出て来た。年の頃は―至ちゃん位、僕の方を見ている。笑ってやると顔中で笑って落ち葉の上でデンダリがえりをした。裏の河でぼんぼんぼん蒸気船の走る音はのどかで一層眠くなる。

至ちゃん、住吉神社へお詣りしたか。僕は目をつむると、その橋付近の雑踏から南側空地のサーカス小屋が目につかんでくる。

此頃はサーカスなどこないのだろうか。サーカスのジンタは誘い

こまずにはおかないようにうきうきした音楽をはやしたてる。楽隊シムタが音楽をやつて後ろの幕が時々サーツと上つて内部がのぞけるしくみになっている。背伸びをしてのぞいたしゅんかん、子供がデングリがえりをしている。僕とチラツと目が合うとニコツと笑つた。其しゅんかん幕が下つた。

アメリカ人の庭で小子ハイがさか立ちをしている。ほんの一秒か二秒でたおれてしまう。小子ハイは顔をまつかにしている。度々やる中にようやく三・四秒さか立ちで立つ事が出来る様になつた。今度はさか立ちで歩き出した。ヨチヨチ・二・三歩歩いたらトンボ返りをうつて倒れてしまった。庭の落葉の上に大の字になり寝たまま息をはずませてゐる。

今日のように暖かい小春日和―其日は双十節であつた。僕と堀尾少尉は揚子江岸の〇〇のの芝居小屋で支那のサーカスを見ていた。

舞台では緑の地に赤でフチをとつた人絹の支那服の小ハイ達が玉に乗つていた。玉は直径五〇センチ位で木で出来ていた。六人の小ハイが一イールサン二イールサン三イールサンで乗つてくるくる舞台の上を走つたり横に行つたり逆さまに走つたりするのである。他人の玉に突き当たつて倒したり乗つてゐる者を突き倒して空カラの玉に飛びのつたり狭い舞台の上を自由自在にころがり廻るのであつた。

其六人の小ハイの中にとびぬけて可愛い七つ八つの小ハイがいた。一番年少であるだけに其芸も一番危なかしげであつた。然し其芸のまずさはかえつて観客の注目をひいた。しばらくすると舞台の真中に一枚の板のシーソーが置かれた。其シーソーで木の玉に乗つた儘順番に登つていくのである。非常にむつかしい業であるが五人の子供はみんなやり通してしまつた。六番目に例の可愛い小ハイの

番になつた。

六番目の小ハイは顔を真赤にほてらして身体中の神経を緊張させ乍ら玉をあやつつてシーソーの上に運んだ。両手で平均を取り乍らちよつとずつシーソーを登り始め、見ていてはらはらする危つかしい芸に見物達は手に汗を握つていた。小ハイの緊張のあまりほてつた頬は出来たてのお菓子か水々しい果物のように一口に食べてしまいたい位であつた。其芸当は六番目の小ハイにはむつかしすぎた。一米ほどのぼつて姿勢がくずれて落ちてしまつた。二回目も三回目も四回目は支えてある台、真中のつい近くまで行つたがだめであつた。道化役の支那人はシーソーの板を自分の頭の上のせて其上に二人の玉に乗つた少年をのせた。満場は拍手であつた。六番目の小ハイも舞台の上で、感心した様に眺めていた。そして上気した頬は自分の芸のまずさをはにかんでゐるように見えるのであつた。

終つて其芝居小屋を出てからも其小ハイの珍しく上品な可愛い顔が頭に残つて消えなかつた。街には菊の花が咲いていた。空は何処までも青く揚子江の水の色も暖かであつた。

僕は暖かいベランダで庭から生い上がつてからみついている蔓バラが新しい芽でもふき出しそうな暖かい光をうけて、うつらうつらしている。隣の庭で、デングリ返りをして仰むけに寝ている小ハイの顔が至公になつたり支那サーカスの六番目の小ハイがいつの間にかやら至公に変わつて、はにかみ乍ら僕に手をひかれて住吉神社の雑踏を鳥居前の方へ歩いてくるのである。

(終り)

四

もぐら部隊長雑記

— もぐら暮らし —

土の中に、家を造つて其の中で暮らしています。外へ出て、光を浴びる楽しみは僕等でないと分らぬでしょう。

暗い穴ぐらの中で、昼も夜もいろりに火をくべているので、誰も煤けて真黒です。別に鏡を見るわけじゃなし、知らぬ人に逢うわけなし、髭は生え放題、顔も手もずす黒く汚い兵隊ばかり出来ました。

— 千人針 —

あなぐらの中の僕の一室には、之は又珍しい佳い香りがプンと流れる事がある。

出征に当つては誰一人、千人針を呉れなかつたので僕は此間迄千人針を持っていなかった。然し今は僕の枕許には何時も一枚の千人針が安置されてある。厳密に云えば一人針である。僕の多幸を祈りつつ一人の乙女が千針結んで香水をふくませて贈つて呉れたのである。その千人針から香いが、ほのかに漂い出すのである。

(断つて置くが内地の娘さんがくれたのではない。現地のうら若い大和撫子が、その町を発つ日にくれたのである。)

— 人形 —

之は穴ぐらの中には、勿体ない女王である。

美しいコスチューム、ロシアの農婦のように、スカーフを頭に被り、頭文字を刺繍でとつてある。流れ出る甘い香りが戦に、いらだつた神経を柔らかく包んでくれる。

こんな人形を欲しいと思つて、お人形を作つてあげようと言ふ、西野久子さんへの手紙の返事に厚かましくも頼んでおいただけである。

— 山鳩 —

むごいとは思いつつ、廢屋の土壁の上にとまっている鳩に、小銃をねらつた。

ズドン、

雪の様な羽が数枚ヒラヒラと散つた時には、命中した喜びよりも愛しさで胸がいたんだ。

友よ、山路がぬかるんで三日も糧食が来ない戦場ならば、僅かの肉を、たとい、フライにして食べたとして許し給え。

— えびフライ —

僕の隊の国光准尉は岐阜の産だが、飛騨の高山や東北の雪国で育つた、至つて口数の少ない温厚粗朴な人である。昨日は朝から一日中、鉄砲を持って山を歩いたが一羽の雉も取れず帰つてきた。

今朝珍しく口をゆすいでいたので、「君が口をゆすぐと今日は雨が降るぞ」といつてやると、

「隊長殿が顔を洗われたから、しようちとありませんわい」と笑い乍ら云う。

我々は此頃顔を洗わぬのが普通になっている。朝食を終わると国光准尉の姿は見えなくなった。

ひるめしの時彼を探していると何処からか帰つて来、唯一言

「駄目でした」

昼食が終わると又彼は消えてしまった。

日が暮れて、僕は穴ぐらのいろりの傍で飯を前にしていらいらしていた。

「国光はどうした早く呼べ！」

せつかちの僕は夕食時人数が揃わぬと不機嫌である。当番が探しに行った。暫くすると

「もうすぐ来られます」と言いつつ帰つて来た。

下ろしてあつた味噌汁を又いろりにかけて待っていると、やがてノツリ国光准尉が帰つて来た。

「料理をしておりましたので」

さし出した飯盒の底には、大の男の彼が、半日の収穫としては余りにみじめな、小さな川えびのフライがままごとの御菜のように二三個入っていた。 一二月二十五日

樟を焚く

直径五・六寸もある、太い樟を切つて来て、生の儘いろりにくべている。たきつけに一才工夫が入るが、燃え出すと、火力も強いし、灰の落ち具合がよくてよく燃える。一番気に入ったのは、香を焚いたような、樟の佳い香りが穴ぐら一杯に立ちこめる事である。樟の

燃える香りを深々と味わい乍ら、夜を徹して語るのも今の陣中の榮しみである。

雨が二日続いて、どの陣地も雨が漏り出し、大騒ぎである。僕のところも方々で、ポタリポタリ漏れ出し、結局寝る所もなくいろりの傍の安全地帯へ集まつて話に花を咲かす。

国光准尉がポツリポツリ話す。彼は三十二才であるが、永年の軍隊生活と浮世の苦勞で見た所一回りも老けて見える。

「隊長殿、国光の郷里の近くに数年前、鉄道のトンネルが出来たのですが、トンネルの工事を始めて以来、家の泉に水が湧かなくなりました。そして、とんでもない村のはずれの或家でどうも、湿気で困ると云うので調べて見ると、其の家の下から清水が噴き出していたのです。それで其の家は移転を余儀なくしました。国光の家では其の泉から水をひいて鯉を飼っています。」

トーチカの雨漏りから、トンネル工事の水異変に端を発して、今日のいろり端は、国光准尉の鯉の話、鵜飼、筈の話へと、進展する。

隊長殿、今度帰ったら御馳走しますよ、尺二・三寸のが何百尾もいます。尺三寸をこえると小骨が多くて食べにくいです。田圃で田螺を取つて来て餌にやるのです。大阪の親戚の者など土産に持つて帰りますが、濡らした新聞紙で包んで置くと暴れないし一日二日は死にません。目玉だけ紙で蓋をはつても暴れません。国光の近くの河には、うぐいや鯉が沢山居ますが、一度それをハツパで取つた事があります。山をくずすハツパが二個余っていたので、巡査に届けると、河へでもほり込んでおいて下さいと言うのでした。村の人は沢山集まつて来て、こちらへこちらへと河の淵になった魚の集まつている所へつれて行くのです。(此の辺から彼の顔は童顔に転じ嬉々

としてくる。)

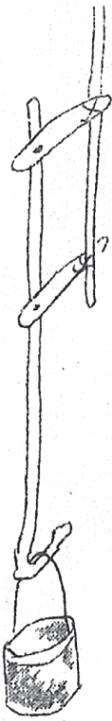
火葉の力は凄いですな、大分沢山とれましたよ。鯉、うぐい、鮎などです。此の近くに御料地の鮎の飼育場があるのです。(長良川の事) 此処の鮎は鵜で取るのですが、鵜匠の手先は実に器用に微妙に動くのです。指先だけで片手に五本位の糸を操るのですが、指先を絶えず捻らして糸のもつれをさばいたり、鮎をのど一杯にためた奴を引き寄せたり、それに煙草を吸う時など、片手で見事にさばきますが見ていて感心しますねー。

鵜飼に使う針を竹につけて、腰位の深さをめぐり乍ら、うぐいや鯉を刺した事がありますが、あれは、こつがあるんです。手を伸ばしてこう水平に突いたのだけでは、いくら刺さつても直ぐ逃げられるのです。こうさつと突いて直ぐに下へ押さえつけるのです。(彼は懸命に力をいれて其の身振りを示す。)

樟は燃えくずれると、真赤な炭火のようになる。いぶらすと暖かい。新しいぬれた生木をたてかける。新鮮な樟の匂いが煙と一緒に舞い上がる。(注)釣手にかけて飯盒の茶が音をたてる。最前線のトーチカに、かくも幽玄な茶道の境地があらうとは、誰も知るまい。

(注)

国光准尉が先日作った田舎の炉にあるあれである



番茶を啜りながら話は続く。

国光の郷里は、魚だけが新鮮じゃないのです。筍もあるのです。之は自慢で名古屋あたりの商人が指定して買いに来るのです。今頃から四月の半頃迄、孟宗が、尺八寸位のがとれます。でっかいですよ。土から芽が出てからとっては、もう硬いのです。土にひびきが入った頃掘り出すと美味しいのです。もうその次には、ハチク、之は主に細工物にします。とても勢いがよく、雪が積もつても、めつたに雪折れなどしません。

「ハチクの勢いは、それから来たのかね」と僕が「半じょうを入れる。

ハチクの次に、マダケ、男だけ、男だけは八月時分です。細長い筍ですが食べられます。あくが強いので、始めは湯煮して、それを藁灰の中に入れてあくをぬくのです。

国光の家の山で秋には松茸がとれます。一番美味しいのは、山でそのまま蒸焼にします。松葉を濡らして松茸にかけて其の松葉に火をつけると、燻った松葉の香りがしみこんでとても美味しい味になります。然し蒸焼をすると、其附近は来年一つも生えて来ないので、自分の山ではやらない事になっています。

たぎる茶の音を聞きつつ、しばし瞑目すれば、筍と松茸のほのかな香りが、沸々と浮び上がって来るのである。しつの事だったか、僕の隊の兵隊の誰かが「軍隊でしゅん、しゅんの物を食わしてくれたら嬉しいのだがなあ」と何か食物の話の際に、しみじみ述懐していたのを覚えているが、其兵もきつと農村出身の兵隊であったに違いない。

日本の国に生まれた事を、こよなく嬉しく思う。

熱い茶を淹れてすすする。

国光が松茸をいぶす時のような手つきで、ほだ火を集め其上に生木を一本たてかける。銃眼から吹き込んだ夜更けの風が穴ぐらの中を旋回し、樟の煙は部屋一ぱいに流れるのである。

―二月二十八日―

穴ぐらだより

― 菜の花 ―

渥ちゃん

元気ですか？

僕の今いる〇〇省程、氣候の悪い所はありません。先日からずっと雨続きで一昨日はみぞれまで降りました。そして天気の時はずっと暖か過ぎる程、二月とは思われぬ位なのです。

今日も兵隊が手紙を書きながら、ぼやいていました。「先日の手紙に支那の冬は、日本の春のように暖かだと書いたのに、その翌日は雪が降りやがって……」

今日は三月二日、雨が続くので依然寒い。部屋の中ではいろいろをどんどん焚いています。部屋と言っても穴の中です。火を焚いて、軍歌や流行歌を唄い続けています。

雨の中を午後、輜重の兵隊さんが、馬に糧秣をつんで運んで来てくれました。馬の背に積んだ、しおれた野菜の束の中にとうのたつた菜の花が咲いて居りました。穴ぐらの中には敵襲で困った時の用意に水を一升壺に入れて準備してありますが、其の壺に菜の花を

活けて飾りました。すると銃眼からさす光をうけて、部屋の中が急に明るくなったような感じがしました。しおれていた菜の花も、勢いづいて、何の慰めもない私達の眼を慰めてくれます。

―三月二日―

― 雨漏り ―

此の間二日続けて顔を洗ったら、其の日から雨が降り出してやまず、土の中の家では、雨が漏り出して大騒ぎです。空き缶を部屋一ぱいに並べると、雨垂れの音でにぎやかな事。誰やらのピアノより素晴らしいリズムです。「アメアメフレフレ母ちゃん……」なんて唄うべからず、兵隊さんは困ります。それよりも、テルテル坊主を作って頭にかける御酒をこちらに廻して下さい。もぐらぶたいちよう

淳子様

― アスパラガス ―

コイチヤン

マサアキ兄ちゃんカラ、テガミキマスカ？ ボクハ、ツチノナカニ、アナヲホツテ、イエヲツクツテ、スンデイマス。アナノナカハ、タイヘンクライノデ、ヒルマモ、ヨルトオナジデス。ソレデヨルモヒルモ ヨクネラレルノデ タイヘンヨロシイ。アナノナカニ、ナガイアイダ スンデイルト、アスパラガスカ、モヤシノヨウニ、ナルダロウト タノシミニマッテイマス。 モグラブタイチヨウセツ子サマ

— 樹水 —

暗い穴ぐらの部屋の中で、ローソクを一本とぼして眺めていると蠟涙が流れて樹水となり、目も眩むばかりの雪の花が、部屋一ぱいに咲きました。

千晴様

もぐらぶたいちよう

— カアチャンの手紙 —

「カアチャンノ テガミハドコヘイツタ カアチャンノテガミガ ミエナインダヨ」と云い乍ら、部屋の中を一ぱいに掻き回していたが、漸く毛布の間から見つけると、ローソクの灯りで目を細くして、顔のたがが、はずれたように相好をくずして、夢中になって喜んでいるのは、僕より六つも年をとった国光准尉、カアチャンと云うのは、彼の妻で芳紀二十五才。「兵隊さんを見ると、オトウチャンと思いきんで」喜ぶ子供がある。

もぐらぶたいちよう

滋子様

— 三月四日 —

戦場の歳時記

— 旧正月の日の半日 —

二月八日、昼食後F少尉と馬に乗って陣地の巡察に出かける。戸数二十位の部落を通りぬける。爆竹の音に馬を驚かさぬように、手綱をしめつつ、軒をのぞくと、戸毎に、茶碗に飯を盛って真中に

線香をつきさし、しゃくし菜の葉を二、三枚さしてある。之が日本のおかがみのようなものであるらしい。晴着を着ている子供もいたが、大抵は平常着のままで机を囲んで料理を食べている。名もない寒村の正月なればこそ斯くもわびしいのであろう。

田の中の一本道を十分も続けて飛ばすと馬も汗をかいた。外套を着てないが寒くない。家のほとりに池があつて洗った人參が山に積まれてある。鮮やかな美しい赤色である。爾を探して二束十銭で買う。一束を分けて馬にやる。ボリボリ食うのを見ているとなる程うまそうだ。一束を後の楽しみに、陣地に馬を進める。後について来ているF少尉の乗馬が僕の手にある人參に食いつこうとする。僕の馬は首をまげて人參を喰おうとして動かない。処置なしである。人參を右に見せたり左に見せたりして兎に角歩かせる。馬の御機嫌をとるのも却々難しい。

S軍曹の分哨に到着する。

「異常はないか？」

「異常ありません。昨夜後の村では夜通し爆竹をたいて居りました。」

「あちらの敵は、あーなつとるからきをつける。油断は禁物ぞ」次にT伍長の分哨へ行く。前は一面沼である。鴨が沢山泳いでいる。

「服務中異常ありません。」

「ご苦労ご苦労」

「鴨はとれるか？」

「とれません。」

「何故だ？」

「直ぐ逃げます。」

「当り前だ。俺がとり方を教えてやろう」と云つてムシロに餌のついた針を結びつけて水面に浮かす方法を教える。但し之は支那人に聞いた方法の受売りである。

「あそここの処に、あんな大きいのがいます。」

指さされた岸边に珍しく大きいのが一羽歩いてゐる。僕は早速撃とうと思つたが、

「お前撃つてみる」

T伍長は忍びよつて、ねらいをつける。

ズドン

ワツハ……忽ち笑声が上がる。T伍長笑いながら頭を掻いてゐる。鴨は沼の真中へ飛び去つてしまつた。

「下手な奴だな、今日から毎日射撃予行演習を百回しろ。」

「惜しい事をしました。もうちよつとです。」

「言い訳はいらぬ、貴様には戦闘でも弾丸はやらぬぞ。」

「隊長殿あそこに鶴が二羽いますが、撃たれては如何ですか？」

「鶴は瑞鳥だ、それに今日は支那の正月じゃないか俺は殺生は嫌だ。」

F少尉は鴨を逃した代償だと言つて鶏を二羽分けて貰う。近くの部落で三日に一度市がたつので其時鶏を買う事が出来るのである。

鶏を鞍につけてO軍曹の分哨に向う。鳥が鳴くと馬が驚いて駈け出す。馬が走ると揺れるので一層鶏は悲鳴をあげる。やかましい事限りなしである。締めつけるような声をきいてゐると気が気ではない。

O軍曹の所へ行くと傍のクリークで、爾が網を打つてゐる。桶の中には見事な、背中の色が変わつて、苔の生えたような大きい鯉が

泳いでゐる。

「でつかいのう」

「隊長殿、主と違いますか？」

真面目な顔をして聞くのは、補充兵で年をとつてゐるが子供みtainな兵隊である。

「主つてなんじゃ？」

「ハッ、こんなの村で主と呼んで居ります」

「隊長殿、水だきされるのなら、後で届けておきます。あすこに、三葉もありますから一緒に御届けします」

O軍曹の指す畠には青々と三葉と人参、しゃくし菜が伸びてゐる。二月と云うに霜になえた形もない。

用事が終わつてから馬首を並べて帰路につく。くつわの響きと鶏の声が、掻き乱すのをはばかりような静かな夕靄が、あたりを一面に包んでゐた。

— 桃の花 —

三月だと云うのに、長い雨の間は気温が下がつた。毎日穴ぐらの中の部屋では、いろりに火を焚いて無為の日を過ごした。乾いた薪も得られないので、樟の立木を倒して、いろりにくべると、よく燃える上に、香をたいたような芳ばしい香りがするので意外な見つけものをした事を喜び、それから毎日樟の生木をくべて其の香りを愉しんだ。

長雨は我々にとつて苦痛の種であつた。塹壕は水浸りになる。土に浸みこんだ水が雨漏りをし始める。立てば頭をうち、足もろくろく伸ばせないような穴ぐらの部屋に雨漏りが始まると尚更窮屈に

なつた。天井に天幕を張つてうけると、暫くすると水囊に水を入れ
たように頭の上に下がつて来る、その水を缶に入れて外へ運び出す。
其通路がぬかるんでいるし、壁の土がぐずれて来るし、服はドロド
ロになる。並大抵ではない。

夜昼を分たず、何もせず大分寝てばかり居つた。起きてゐる時は
いろいろを囲んで、いろいろな話に花を咲かせた。長い間風呂にも入
らぬ着換えも出来ず、洗濯も出来ないの、兵隊は虱をわかした。
ローソクの灯りで、虱の討伐が開始された。それを見てゐると、わ
いてゐない筈の僕の身体までむず痒くなつて来た。

三月六日、朝起きると雨は夜の間にやんで、ガスがかかつていた。
こりや良い天気になるわいと喜んでゐると案の定晴れた空が見えて
来て暖かい陽が輝き出した。兵隊は穴から飛び出して歓声をあげた。
陽が照り出すと歩けば暑い位である。かびの生えかけた毛布や、シャ
ツが鉄条網の上に拵げられた。虱のわいたシャツや千人針を、乾パ
ンの空缶に入れて煮き出している。久し振りの風呂を沸かす兵隊の
顔も輝いている。

長い間運動しなかつたので、雉でも撃つてみようと思つて裏
山を散策に出かけた。じわじわと踏む靴裏の土も暖かい。枯草の間
から草の芽がのぞいている。戦場となる前菜園だつたのだろう、こ
ぼれた種子から一面に菜つ葉の二葉が出てゐる。林の中には支那名
物の、うるさい、羽の白いかち鳥の他に、山鳩や鶉や、郭公と鳩の
あいのこのような山鳥や、めじろや、鶯によく似たのや、いろいろ
な種類の鳥達が、賑やかに、思い思いの声で啼いてゐる。

歩いて行くと足元の叢の中から、突如一声あげてパタパタパタと

力強い羽搏きをして雉が飛び立つ。銃を片手に杲然としてゐる僕を
尻目に、彼方の村へ消えてしまふ。追いかけて行つていくら探して
も分るものではない。保護色であるから逃げる迄は分らない。「雉
も啼かざれば撃たれまい」とはよく云つたものだと思ふ。

午後藤谷少尉の陣地へ馬に乗つて出かける。

空は晴れて、蹄の音も愉しい。遙か敵陣の方に煙が細く上がつて
ゐる。多分同じように濡れた綿入れの軍服を干している事だろう。
春の息吹を感じつつ馬に揺られて行くと、何だか俳句でも一首浮か
びそうになつて来る。

春浅し 春浅し 雨はれて 雨はれて など考えてゐると、警戒
の為従いて来ている兵隊の会話が耳に入る。

「ぜんざいの風呂に入りたいなあ、餅を浮かべて……」

僕は思わず噴き出して、振り返ると、陽にやけた上に、垢といろ
りの煤で真黒な顔をした、今年三十になる大平という一等兵である。
泥んこの軍服を着た此の一兵士には、春風も何処吹く風で、句作の
風流など、みじんも毛頭にないのである。額には玉の汗すらかいて
ゐる。僕は手綱をしめて馬の歩度をゆるめた。「今度慰問袋に、ゆ
であずきの缶詰が入つていたらこの男にやろう」と思つた。

藤谷少尉の陣地に着くと、皆裸になつて服もシャツも鉄条網に干
してゐた。アンペラの上にとぐろを巻いて兵器の手入れをしてゐる。
向うの丸い禿山の上に白い鉢巻のようになってゐるのも眼鏡で見ると
洗濯物である。藤谷少尉は、ズボン一つで、顔には山賊のよう
な髭を生やし、頭に鉢巻をして、はちまきの間へ手製のキセルをつ
きさしてゐる。物凄い柄の悪い形相である。同行の国光准尉が、カ
メラに収める。その写真が出来たら、彼の新婚間もない女房に送つ

てやろう、どんな驚き方をして背の君をいとおしむ事だろうか。

帰り、壊れた無名部落を通りかかった時、僕は思わず軽い叫び声を発する所であった。拍車を軽くあてて馬を飛ばした。

僕の目に入ったのは一本の桃の花であった。こんな所に桃があったのかと驚いた。ほのぼのと鮮やかな花弁は目にしみるようであった。

荒涼の戦場に咲き出た桃の花を眺めて、僕は武人らしくもなく胸をつまる思いであった。

内地にはまだ桃は咲いていないだろう。うつとりと眺めているうちに、僕は昨日受取った、故郷からの母と兄の手紙を思い出した。それには妹滋子の縁談がまとまり、此の五月に式を挙げる事について、「滋子の縁談がまとまって之程嬉しいことはありません。娘を持つ親として何よりの喜びです」と母は細々と相手の人柄や家の事が、準備で多忙な事と併せて書いてあった。兄からは「滋子は霜焼けで指がふくれて、エンゲイジリングが指にはまらず嘆いている」嫁ぎゆく滋子の事を考えて、今迄苦勞なく育ってきたが、之からは波風も荒かろうと、いじらしい気がして来た。

然し之は僕の感傷であつて、御本尊は兄の氣遣いをよそに、希望に満ちて新しい生活を夢みているかも知れない。丁度今日の前に咲いている春風の中の桃の花と同じであるかも知れないであろう。

—三月八日—

五

最初の「鳥の糞」解題—鳥の糞を始めるに際して—は、「鳥の糞」を刊行するにあつたの刊行の辞で、これはあくまでも軍隊生活のささやかな「近況報告」であり、「陣中通信」であつて、決して「戦場の風物や兵隊の人情」を描いたり、「角ばつたルポルターージュ」を狙つたものではないことを宣言する。更に付け加えて、この雑誌に収録した文章は現在大阪外語に在学中の弟（潤三をさす）の力を借りて「小生の私信中より私事に互る事」をカットして編集・印刷してもらい、「親戚始め極く親しい範圍の人達」に読んでいただく事にしたものと舞台裏まであかしている。

続けて、標題にふれて「鳥の糞」などという「甚だ上品でもない」ものにしたのは、第一に「私の手紙と云うものがそもそも誰方も御存知の悪筆」だからであり、第二にその内容たるや「腹の中で飽和され消化する力足らず生みつばなしにされたまま、いや生まれると云う様な上品なものじゃなくて、（中略）鳥の糞のようなもの」だからであつて、折柄、火野葦平の出世作「糞尿譚」にあやかるつもりは毛頭ないが、名前などは慣れればどうだっていいと思つて仮につけたものだとことわる。

こういう謙遜の辞のあとにはしばしば美しい場面、印象的なシーンなどが、点綴されるのが常だが、この小文のラストはまさしくその典型と言つてよいであろう。

「私」とその部隊は今中支の都会の一軒の洋館に住んでいるが、大木に囲まれ、あたかも森の中に住んでいる感じで、家の裏には支

那では珍しく清流の○河が流れている。あたりの森には鳥の大群が巣くっている。

二階にいた私が不図目を庭に落とすと、年の若い兵隊が一人、幹にもたれて空を仰いでいる。鳥の大群がどこかへ飛び去っても兵隊は空を仰いだままでしかも二階の私には気づかないようです。

今度は指をあげて空間に何か書いています。此年の若い兵隊は後三日もすれば来る正月を始めて戦地で迎えるのです。きっと故郷の正月でも思い出しているのでしょう。絵を書いたの字を書いたのか兄弟の名をかけたのか私には分かりませんが、其の時私は右の人指ゆびで左の掌にカタカナの字を書いて居りました。

トリノフン、トリノフン、三度書いてつばをつけてこすつて臭いをかぐと少年の時友達同志信じあつていた仄かなる臭いと共に美しき日の数々の思い出がよみがえり、しばしの間楽しき感傷にこゝこつとなつたしだいでありませぬ。

出征した中国の都会での夕暮れにふと目にした部下の若い兵士の行動から、それと二重うつしになつて自らの少年の日の「美しき日々」の数々の思い出がよみがえり、恍惚となつた所以を記しているのだが、若書き故に表現に多少の不十分さはあるが、そこには静謐な感動があると言つてよいだろう。

〔「降誕祭の朝」〕は昭和14年12月のクリスマスの朝に、出征中の中国湖南省の省都南昌で遭遇したある事件を叙したもので、これに

は初稿と定稿とがあつて、事件の大まかな概要・原型を記したのが、「鳥の糞」一号に掲載された「降誕祭の朝」（これをここでは初稿と呼ぶ）。のちに、これに手を入れて練りあげ改題したのが「クリスマス・キャロル」（こちらは定稿と呼んでおく）で、両者は比較すれば明らかのように定稿の「クリスマス・キャロル」の方が秀逸である。従つてここでは以下定稿の本文に従つて述べておきたい。

南昌での庄野隊の任務は兵団司令部の警戒であつたが、住民は殆どが避難した死の町で戦場らしい緊迫感は何もなかつた。

ところが、眠りについて何時間たつたころであろうか、私は異様なもの音に目を覚まされたのであつた。

たとい前線から離れた司令部とはいへ、やっぱり戦地のことである。私はしゅんかん耳をそばだてて、聞こえてくる異様なもの音の正体をたしかめようとした。（中略）

もの音は遠くから聞こえてくる人声であつた。その人声は一人ではなくおおせいであつた。しかもその人声が、直感的に私たちに何の敵意をもつたものではないという気がした。（中略）歌だ。うたつているのだ。声をあわせてうたうということ、私は長く聞いたこともなく忘れきつていたのであつた。

私は毛布にくるまって横になつたまま、その声に耳をかたむけた。

何年か聞いたことのなかつた、よくハーモニーした合唱で、曲がクリスマスの讃美歌であることがわかつた。

私の目はもうさめきつていた。クリスマス・キャロルは、お隣の教会から暗闇をぬつて流れてきているのであつた。人の出

入りを見かけたことのないあの教会に、コーラスをする人が住んでいたのであるうかと不思議な気がした。私はクリスマス・キャロルを聞いているうちに、やっときようがクリスマスであることを思いだした。

そうして、クリスマス・キャロルを聞くことによつて、「こんなにもコーラスが美しく人の心を柔らげるものである」ということをはじめて知り、「廃墟の死の町のなかに神と平和を讃える信者たちが、ひそやかに忍耐強く戦いの恐怖のなかに耐えしのんでいることを知つて、私の胸のなか」は暖かくなつて来るといふもので、言われるようにクリスマス・キャロルの歌がキリスト教徒でもない庄野少尉の詩心を大いに刺戟して文章を書かせ、もつとはつきり言えば、「鳥の糞」といふ雑誌の刊行へと突つ走らせる原動力になつたのかもしれないことを暗示しているようにも見える。

〔新年を迎える三日間の日記〕のうち、初日は「十二月三十一日」。負傷して入院中の阪口中尉を今夜は見舞いに行く約束がある。それと今年の仕事は来年に残さぬよう書類を一気に作成する。仕事が終わった六時頃阪口から伝令が来てスキヤキの用意がしてあるからすぐ来いというので、外套をとりひとまず宿舎へ帰る。すると炊事当番が薄暗い台所で炊事に懸命である。ここから庄野隊長の気持ちが変わつてゆく。

「隊長殿、風呂が良い加減です。」折角待つてくれている湯を断る事も出来ず今年最後のあかも落とそうとカメ風呂に入

る。風呂と炊事は隣合せなので僕は湯につかつたま話しかける。「お正月の料理は何と何だい?」「たいの尻頭、ごまめ、こんぶ、するめ、かちぐり、かずの子―餅は明日四時起きして焼いて雑煮に入れます。」「ほほう中々御馳走だな。」焼物の香いがプンプン流れてくる。僕は手ぬぐいを四つに折つて頭にのせる。そして目をつむる。たちまち我家の台所が目に浮かぶ。今は夕方の七時、父は漸く仕事が片づいて茶の間の机にすわつてゐる。仏壇と神棚には燈明が上つてゐる。至公と滋子はずまらぬ事で小競り合いをしてゐる。母は台所で忙しそうにお煮しめをたいてゐる。父が二階に向つて二三回呼ぶと潤三がのっそりと降りてくる。滋子が雑誌をよんでいる。「みんな神様を拝んだか、仏壇を拝んだか。英二の武運長久を祈るんだ。」殊勝に皆たつて仏壇を拝む。台所にはお煮しめをたく湯気がもうもうと立上つてゐる。

ここに描かれる庄野隊長の心理の移りゆき―負傷して入院中の阪口を見舞うために外套をとり宿舎へもどるのだが、薄暗い炊事室では当番の兵隊が夕食の準備と正月料理の用意に懸命である。しかも目ざとく隊長の姿に気づくと「隊長殿、風呂が良い加減です」と声をかけられると、途端に人情派で人の好い隊長は部下に気をつかつて「折角待つてくれている湯を断る事も出来ず」入浴↓炊事係との正月料理の対話↓庄野家の大晦日の風景追想(庄野家の大晦日の風景を人々と共に活写して鮮やかである)↓その追想は同時に今炊事をしている兵隊達皆の郷愁↓そこまで感傷的になればスキヤキの用意をして待つてゐる阪口の事などはもうきれいに忘れてしまつ

て夕飯は宿舎ですませて行くことになるわけであるが、そこに至る隊長の心理の変化、あるいは経過をたどる手つきは決して凡手ではない。また挿入されている逸話は、「例えば当地の肉は新鮮過ぎる為か水牛の肉か、ともかく固くて歯が立たぬので有名である。それにも関わらず僕の食べるビフテキはとても柔い。包丁の背で丹念にたたいてくれてあるからである。」というようなにおのずと隊長の敬愛すべき温厚善良な人柄とそれを支える部下達の心服の程が見事に組み合っていることを示していて小気味よいのである。

次の〈「一月一日」〉は英二文学には少ないのだが「どうもいけねえー武人らしくない。」(新しく送られてきた家族の写真に向って新年の祝詞を言ったところ目頭が熱くなって涙ぐんでしまったことに対してテレテ言っているのである)という紋切型の反応は聞く方がつらいものであろう。

〈「庭の小ハイ」〉の「小ハイ」とは中国語で子供のこと。「至²」とは庄野至のことで英二・潤三の弟である。これは〈至君幻想〉ともいうべき美しい作品である。

「正月三日」——小春日和のように暖かな日、二階のベランダで僕が日なたぼっこをしていると、隣家はアメリカ人の家なのだが、その庭へ一人の子供一年の頃は至ちゃん位の子が出て来て僕の方を見ているので笑ってやると顔中で笑ってデングリがえりをした。

目をつむるとその連想で僕と堀尾少尉は支那のサーカスを見ていた。六人の子供たちが木の玉に乗って争うゲームからやがてシーソーの板の上を木の玉に乗ったまま順番に登ってゆく非常に難しい業に変わる。

その六人の子供の中に「とびぬけて可愛い七つ八つ」の子供がいて、最年少であるだけにその芸も「一番危かしげ」であり、「其芸のまずさはかえって観客の注目」をひくが、その子は結局何度やっても成功しなかった。難しすぎたのだが、サーカス小屋を出てからも「其小ハイの珍しく上品な可愛い顔が頭に残って消えなかった」ばかりでなく、隣家のアメリカ人の子供が「至公になったり支那サーカスの六番目の小ハイがいつの間にも至公に変わって、はにかみ乍ら僕に手をひかれて」くるのだが、そのとき僕はベランダでうつらうつらしている。

至君、アメリカ人の子供、サーカスの小ハイと三人の子供をそれぞれに印象的に描き分けて、後年の児童文学作家としての片鱗を見せているのは流石である。

最後に庄野潤三の「編集後記」が七行付けられているが、型通りのものと言ってよい。奥付の発行日は「昭和十五年二月二十五日」である。

六

「鳥の糞」の第一号の本文が11頁なのに対して第二号では18頁と大分増えているのが特徴の第一。

第二は大きく次の三つ——「もぐら部隊長雑記」、「穴ぐらだより」、「戦場の歳時記」に分けられ、それらが更に細分されるといふふうになっている。もぐら部隊長のタイトルが示すようにこの部分に収録の文章は基本的にユーモラスであり、〈もぐら暮し〉では、土を掘っ

てその中で暮らしているので囲炉裏のススメとのび放題のヒゲに、手も顔も洗わないので皆真黒だといひ、〈千人針〉ではあなぐらの僕の部屋では時に珍しい佳い香りが流れることがある。僕の出征の際には誰一人として千人針をくれなかつたから今まで僕には千人針はなかつたが、今は一人の乙女が香水を含ませて贈ってくれたのでほのかに漂い出すのである（ことわつておくが贈主は内地の娘さんではない、現地の「うら若い大和撫子」である。）と思わせぶりに書き、「人形」ではもぐら部隊長の部屋には不似合いな美しいコスチュームの「女王」のような人形があつて「戦に、いらだつた神経を柔らかく包んでくれる。」どうしてそんないいものが舞いこんで来たかと言へば、「こんな人形が欲しいと思つて、お人形を作つてあげようと云う、西野久子さんへの手紙の返事に厚かましくも頼んでおいた」からだと言へると云う。

〈山鳩〉は廢屋の土壁の上にいた鳩を小銃で打つた時、命中の喜びよりも命を奪つた「愛しき」で胸が痛んだ。しかし、「友よ、山路がぬかるんで三日も糧食が来ない戦場ならば、僅かの肉を、たといフライにして食べたとして許し給え。」ここで作者が試みていることは二つあつて、一つは他の生命を奪つたことへの自責の念、罪悪感の追求と、もう一つは多様な文体の實驗的試みであろう。そして後者の試みは変化のある文体の創造を幾つも試みている点で實驗的意欲については評価すべきものがあると言つてよいであろう。

〈えびフライ〉は第二号でこれから頻繁に登場してしかも極めて魅力的なキャラクターの持主である国光准尉のエピソードである。彼は二日ばかりで夕食のお菜を取りに行くが、一日目は一羽の鳥もとれず、二日目は魚を取りに行くが、川えびがたつたの二、三匹と

いう情けない戦果が披露される。末尾に「二月二十五日」とあるので、昭和15年2月25日」であることがわかる。〈樟を焚く〉では囲炉裏で燃やすたきぎで一番よいのは樟。直径五、六寸もある太いのを切つて来て生のままいろりにくべる。たきつけに一寸工夫がいるが、火力が強く、灰の落ち具合がよく、よく燃えること。一番気に入つたのは「香を焚いたような、樟の佳い香り」が穴ぐら一杯に立ちこめる事で、その中で夜を徹して語るのも陣中の楽しみの一つである。

雨が二日も続いてどの陣地も雨漏りがして大騒ぎ。寝る所もないので皆でいろりの傍に集まつて話す。国光がポツリポツリ話す。彼は32歳だが、永年の軍隊生活と浮世の苦勞で一まわりも老けて見える。数年前故郷の近くで鉄道のトンネル工事が始まると、家の泉に水が湧かなくなつた。ところがとんでもない村のはずれの家が湿気で困つたというので調べてみると、その家の下から清水が噴き出してゐた。それでやむなくその家は移転し、国光の家ではその泉から水を引いて鯉を飼つてゐるという。だから、日本に帰つたら鯉を御馳走するといふ。尺二、三寸のが何百尾もいて、尺三寸をこえると小骨が多くなつて食べにくい由。エサはタニシで大阪の親戚の者など土産に持つて帰るが、ぬらした新聞紙に包んで置くと、あばれないし、一日二日では死なないといふ。

また、一度ハッパで河の魚を沢山とつたことがあるといふ。村人は知つていて河の淵になつた魚の集まつてゐる所へ行つてハッパで沢山魚をとつた。

それから鵜飼の話、筍、松茸と国光の話は果てしなく続くのであるが、話の量、質共に庄野部隊ナンバー・ワンの語り手であり、このあとどんな話が出てくるか興味津々であるが、二号で終わつてし

まったために出番がなくなってしまったのが惜しまれる。末尾に「二月二十八日」とあるので、「昭和15年2月28日」であることが判明する。

七

次は「穴ぐらだより」³からであるが、これらは内容から見て昭和15年2月末から3月4日までの短い手紙を集めたものである。

最初の「菜の花」（3月2日付）は二番目の妹の渥子にあてたもので、今いる場所の気候の不順さ——ずっと雨続き、その上みぞれまで降ったかと思うと、晴れば暖かすぎて今度は「二月とは思われぬ位」とボヤキ、3月2日の今日は雨続きで寒く、穴の中で火を焚いて軍歌を唄っている。

雨の中、午後に運ばれてきた糧秣の束の中に菜の花が一本咲いていたのを見つけて、一升瓶に入れて飾った。すると、部屋の中が急に明るくなり、何の慰めもない私達の目を慰めてくれているとして、雨と寒さと穴の中での暮らしにうんざりしている中で辛うじて見出した一本の菜の花に慰めを与えられている現実を伝えている。

「雨漏り」は戯文で、二日続けて顔を洗ったら、その日から雨が降り出して穴の中の家はそれで大騒ぎ。空缶を部屋一杯に並べるとにぎやかで、誰かさんのピアノより「素晴らしいリズム」。「アメアメフレフレ……」なんて唄っては兵隊さんは困ります。それより、テルテル坊主を作って頭にかける御酒をこちらにまわして下さい。宛名の「淳子さま」は未詳。

次の「アスパラガス」も戯文で、モグラ生活を揶揄しているが、平凡。宛名の「セツ子さま」「マサアキ兄ちゃん」は未詳。

「カアちゃんの手紙」は冒頭の「もぐら部隊長雑記」中のユーモラスで魅力的なキャラクターの、国光准尉のスケッチである。彼の日常は恐らくさもありませんと推測され、益々読者の興味を引くであろう。

宛名の「滋子」は庄野家の長女で、英二のすぐ下の妹。「戦場の歳時記」の「桃の花」の末尾に今度滋子の縁談のまとまったことが記されている。

八

「戦場の歳時記」には「旧正月の日の半日」と「桃の花」の二編が収められており、この順序でみてゆくことにする。

二月八日は中国の旧正月であるが、F少尉と馬で巡察に出かける。戸数20位の部落を通りぬけながら様子を観察すると、家ごとに茶碗に飯を盛って真中に線香をつきさし、しゃくし菜の葉を二三枝さしてある。これが日本流に言えば「おかがみ」であるらしく、晴着を着た子供もいたが、大抵はふだん着のままで机を囲んで料理を食べている。名もない寒村の事ということもあるかもしれないが、「わびしい」思いは否定できない。

田の中の一本道を十分程とばすと馬も汗をかく。家の傍に池があり、洗った人参が山と積まれている。二束十銭で買い、一束を馬に食わせる。あと一束は後の楽しみに馬を進めようとするが、あとか

ら来るF少尉の馬も僕の馬も共に人參を狙って動かない。それで人參を右に見せたり、左に見せたり、とにかくだましながら、S軍曹の分哨に着く。異常のない事を聞き、次にT伍長の分哨へ行き、異常なしとの報告を受ける。鴨はとれるかと聞くと、すぐ逃げられてとれないというので、中国人から聞いた受け売りの鴨とりの方法を教える。

大きい鴨が岸辺にいろのが目だったのでT伍長に命じると、忍んで行って狙いをつけるが、玉は当たらずに池の真中へ逃げられてしまう。そこで伍長との間に半畳の入れあい——こんなに下手では毎日射撃練習を百回やれ・貴様には戦闘でも弾丸はやらん↑↓隊長殿、あそこの二羽の鶴を狙ってはどうか・鶴は瑞鳥だ、俺は殺生は嫌だ——というぐあいにもぐら隊長と部下との間にはあの軍隊の鉄の規律や上意下達、無理偏にゲンコツというような不条理や強制、押しつけはなく、代わりに対話とユーモア、思いやりがあったことはおさえておかなければならない。

O軍曹の分哨に行くと、中国人が捕まえた見事な鯉——主ではないかという程の大きなのを見せられて驚く。F少尉と帰路につく。

「桃の花」は季節は春、三月だが、長雨の間は気温が下がるので、穴ぐらの家では毎日火を焚いてしのいだ。乾いた薪は手に入らないので立ち木の樟をためしにもやすと香をたいたような芳しい香りがあるので意外な見つけものをした事を喜び、それから毎日樟をくべてその香りを愉しんだ。

長雨には悩まされた。穴ぐらの家は水浸しになる。天井から雨漏りが始まると足もろくろく伸ばせないような穴ぐらの部屋はなおさら窮屈になった。天井に天幕を張って受けると、やがて頭の上に垂

れ下がって来るのでその水を缶に入れて外へ運び出すのだが、その通路がぬかるんでいる上に、壁の土が崩れて来て、服はドロドロになるので並大抵の苦勞ではなかった。また、長いこと風呂に入らず、着替えもしないので兵隊は虱をわかし、よくローソクの灯りで虱の討伐をした。

三月六日は久しぶりに太陽が出て、兵隊は歓声を上げて毛布や衣類を干し虱を煮沸して退治する。

英二は鉄砲を持って裏山に雉撃ちに行く。山野は至る所草が芽を出し、いろんな種類の小鳥が啼いている。雉は足元の草むらから突如一声をあげて飛びたち、啞然としている英二を尻目に消えてしまうので、とらえようがない。

午後藤谷少尉の陣地に馬で行く。空は晴れて、蹄の音も愉しい。遙か敵陣の方にも煙が細く上がっているのは我々同様軍服など干しているのであろう。道中、護衛の兵隊の会話が耳に入る「ぜんざいの風呂に入りたいなあ、餅を浮かべて……」に思わずふき出す。これは今年30歳になる大平一等兵だが、今度慰問袋にゆであずきの缶詰が入っていたらこの男にやろうと思ったと部下へのやさしい気遣いを示す。

藤谷少尉の陣地では皆裸で洗濯物を干し、兵器の手入れをしている。当の少尉はズボン一つに、山賊のようなヒゲをはやし、頭の鉢巻の間にはキセルをさすという「物凄い柄の悪い形相」である。同行の国光准尉がカメラに収めたので写真が出来たらどんな反応をするか彼の新婚間もない女房に送ってやろうと思う。

帰途、その名も知らない部隊を通りかかった時、思わず英二は「軽い叫び声」を出しそうになる。鮮やかな桃の花が一本、目にしみる

ように咲いていたからで、「胸つまる思い」であったと記すのだが、その背景には母と兄から昨日受取った手紙のことがあった。それには妹滋子の縁談がまとまり、五月に式を挙げる事について、「滋子の縁談がまとまって之程嬉しい事はありえませんが。娘を持つ親として何よりの喜びです」と母は言い、兄からは「滋子は霜焼けで指がふくれて、エンゲイジリングが指にはまらず嘆いている」とあった。これに対して兄の英二としては「嫁ぎゆく滋子の事を考えて、今迄苦勞なく育つて来たが、之からは波風も荒かろうと、いじらしい気がして来た。」と兄らしいいたわりと感傷をまじえて記している。「桃の花」はスケッチ風に描いた短編小説と言った味わいがあるが、事件や波乱などは一切ないのだが、これが庄野英二の骨法、あるいは作風と言った趣を早くも示していて注目してよい作品と言つてよいであろう。

所で、「鳥の糞」の発行はこの第二号で終わりとなった。一号の奥付によれば、「昭和十五年四月二十日発行」ということになる。

前引の編集発行者 庄野潤三の言によれば「春になって兄からの手紙はぼつたり跡切れてしまった。原稿が来ないのでから「鳥の糞」も出しようがない。⁴」

英二の原稿が中絶した経緯については既に述べたので繰返さないが、刊行後間もなく激戦があり、敵の機関銃弾が右手を貫通し、のち右手が不自由になる重傷を負って入院・内地送還となったため、物理的に不可能となったからである。

注

1 95・3・30 新潮社。初出は「新潮」94・12。もう一つは「軍隊と兄と『ロッテルダム灯』」(『庄野英二全集9巻月報2』) 昭和54・5 偕成社)

2 庄野貞一の五男。昭和3年生まれ。関西学院卒業。昭和27年毎日放送に入社し、プロデューサー・映画部長・制作局長をつとめ、昭和61年退社。織田作之助賞受賞の『足立さんの古い革靴』『三角屋根の古い家』の他、父や兄などの身近な人を詩情豊かに描いた作品にすぐれている。

3 本章(七章)中に出て来る人名については庄野家の五男である至氏にお尋ねしたが、文中に記してある以外の事は不明、おそらく親戚以外の方ではなからうかとのご教示をいただいている。記して謝意を表す。

4 注1のうち、二つめの方参照。